1/5 日本海

「神の火」のそばで

福井の原発 半世紀

4

現在の思い調べたい

「この辺りは瓦の産地でね。これは生徒たちの手作りなんです」。越前市の元教諭、岡田栄一さん(80)は十二月中旬、かつて校長を務めた武生第二中学校（同市）を久々に訪れ、入り口にある越前瓦のモニュメントに目を細めた。約二十年前、教員としての「最後の授業」として原発の問題を取り上げた思い出の学校だ。

敦賀市で一九六二（昭和三十七）年に教員生活をスタートさせた。ちょうど県内への原発誘致が始まったころ。「原発が来ると生活が豊かになるという評判だが、本当にそうだろうか」。地理の教諭として、原発が地域の生活に与える影響を調べたいという思いに突き動かされた。テープレコーダーを持って毎週末のように、立地予定地の敦賀半島の漁村などに通い、住民たちの証言を記録した。

武生工業高校（越前市）に異動後の七二年、同僚の先生たちと一緒に文化祭で、原発誘致がもたらした地域の荒廃や公害の恐ろしさを描いた演劇を上演した。その名も「漁村にやって来た巨人」。生徒たちから大きな拍手喝采を浴びたことを覚えている。

原発に関する新聞スクラップを集めた記録集も出版。自ら現地で撮影した写真を生かし「原子力発電と環境破壊」と題するスライド映画をつくり、授業で活用した。放射能の問題などに触れた上で「原発を絶対安全に運転してもらうように、地域の人たちが声を上げなければならない。自分たちの問題や、と声を上げないと安全は保てない」と説いた。

「国策」にあらがうかのような教員の行動。時に圧力も感じた。当時校長から直接、「あまり活発にやらんでおいてくれ」と言われたこともある。だが、行動を変えることはなかった。

「やっぱり勇気は必要だった。われながら頑張ったと思いますよ。なぜしたんか、と言われると、せざるを得なかった気がしますね。そんなにひどい使命感でもないんですけど」

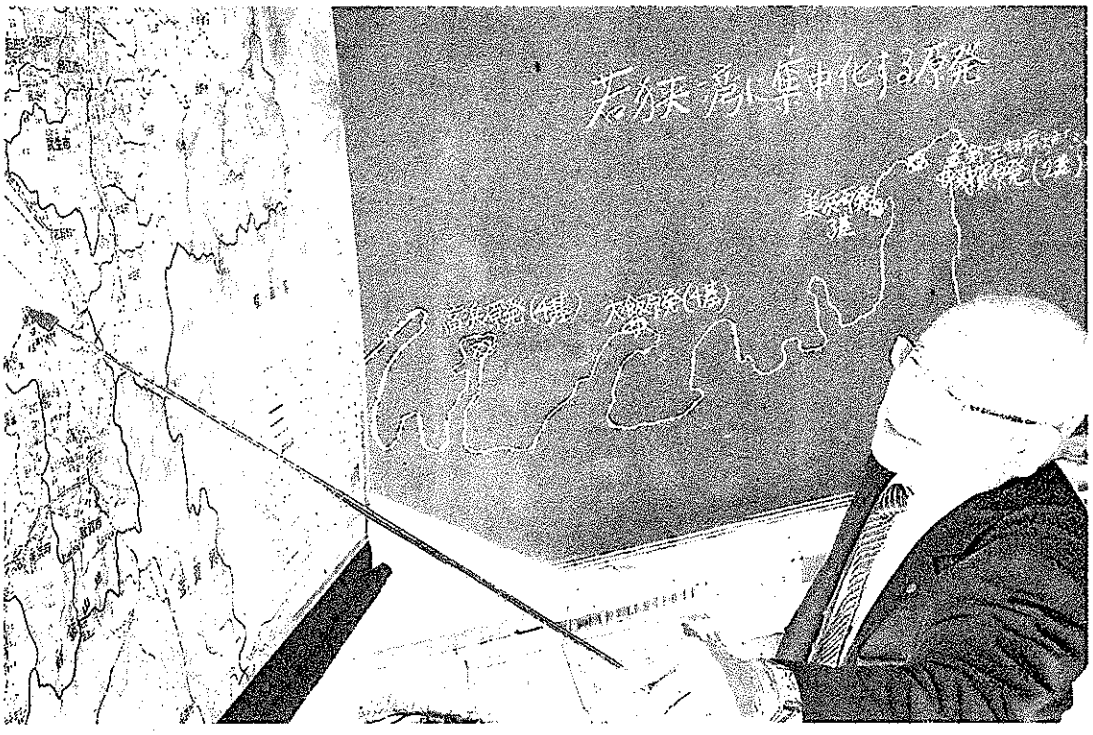
県教委にはにらまれていたはずなのに、思いがけず越前市の二つの中学校で校長を務めた。校長として異例の「最後の授業」は武生二中の三年生の五クラスで行った。黒板に敦賀半島と若狭湾の地図を書き、十五基の原発の立地場所を紹介。原発の構造や発電の仕組みを説明し、放射能の恐ろしさや原発の問題点、県内に集中立地した理由などを説明した。生徒たちは、真剣に話を聞いてくれた。

福島第一原発事故で、図らずも授業で話し続けたことが現実のような形になってしまった。同窓会などで当時の生徒らに会うと、「先生の話は本当だったな」と言われる。「うそは言っていなかった、と子どもたちには認められたかもしれない」とは思うが、なお続く福島の惨状に胸を痛める。

定年後は、趣味の写真や海外旅行で充実した生活を送ってきた。それにも区切りをつけた今、「もう一回原発をやらなかん」と新たに新聞のスクラップをまとめている。「若狭の人たちが今、本当にどう思っているのか。もう一回、それを調べたいと思っている。（福井の原発が運転を開始して）五十年にあたって、できたらもう一回」

（佐藤大）

越前市の元教諭 岡田栄一さん(80)



◀原発を取り上げた「最後の授業」を再現する岡田栄一さん＝越前市の武生第二中学校で